



けやき通信

Cooperative Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第14号 (2024年2月)

共同教育学部と地域の教育界 —組織・人事面での連携・協力—

群馬大学共同教育学部長 藤森 健太郎

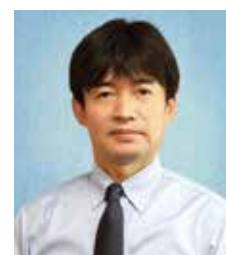
群馬大学の教員養成分野は、群馬県教育委員会等との連携により、地域密接型を目指す大学として、義務教育諸学校に関する地域の教員養成機能の中心的役割を担うとともに、群馬県における教育研究や社会貢献活動等を通じて我が国の教育の発展・向上に寄与することを基本的な目標としています。これは「国立大学のミッションの再定義」という公式な形を通して発表されているものです。最終的には全国的な貢献を見据えているものの、群馬県という地域を非常に重視しています。そのことは、宇都宮大学との共同教育学部になっても変わりありません。

再定義されたミッションでも具体的に挙げられているとおり、群馬県という地域の教育、なかんずく教員養成について十分な貢献をするためには、群馬県教育委員会等の諸団体とも密接に連携を取り、協働していかなくてはなりません。群馬大学では従来から、県や市町村教育委員会等の皆様と良好な関係を築き、協調して地域の教育界の発展に努力してまいりました。現在、どのように地域の教育界との関係を築いているのか、その一端を簡単にご紹介しましょう。ただし、学部長・研究科長としての立場から、組織面における協力関係に重点を置きたいと思います。

まず、学部・研究科の教員（教授・准教授）として、市町村教育委員会等との連携のもとに県教育委員会から推薦等をいただいた方々をお迎えしています。このうち准教授の皆さんは、数年間大学で活躍していただいた後、ふたたび地域の教育現場に戻って行かれます。つまり、大学に在任中は、地域の教育界での経験を生かした研究・教育に邁進され、また、地域の教育現場に再び移られてからは、教員養成大学の現状や運営形態をよく理解した方々として、その後の地域教育界と大学との連携の要になっていただけるのです。教授としてお迎えする皆さんには、大学に留まっていただくことになりますが、大学赴任後も地域の教育界との連携において大きな力となってくださっていること、言うまでもありません。

附属学校園に目を移すと、現在、副校園長先生以下教

員陣のほとんどが、地域の教育界とのいわゆる人事交流で赴任されています。地域教育界から赴任していただいて、いずれはまた公立学校や行政等、地域の教育現場に移られるというサイクルです。大学附属学校園の教員採用の方法にはいろいろなものが考えられますが、群馬大学のこの方式のメリットは、地域教育界における経験を生かして附属学校園の研究・教育を充実させられるということ、また、附属学校園や大学のことをよく理解する方々に地域の教育界で多くになっていただけることだと思っています。地域教育界でご活躍の後、再度大学にお迎えすることも視野の内にあります。なお、現在附属学校園では、いわゆる働き方改革にも精力的に取り組んでいます。かつての附属学校園には、夜遅くまで働くハードな職場というイメージがありました。今では、働き方改革でも地域のモデル校になり、そのノウハウを、やがて地域の教育界に移る先生方にも伝えたいと願うほどの改善が進んでいると思っています。



最後に、教職員としてお迎えしているわけではありませんが、教職大学院に地域の現職教員の方が多く入学しています。教員養成大学に今求められているのは、学生・院生を送り出しておしまいということではなく、教員の皆さんの生涯にわたる学びに貢献することです。これも、県や市町村の教育委員会等、地域の教育界との連携・協力の一端と言えます。

いわゆる教員不足や教員志願者の減少等、教員養成に課題が山積する中で、大学と地域教育界との密接な連携が全国的な課題となっていますが、群馬県では以前から密接な関係が築かれていました。上述の通り今回は組織面での交流・連携について主にお話ししましたが、各方面にその協力関係は広がり、根を下ろしています。今後とも、地域教育界の皆様と手を携えて、群馬県の教育振興に貢献したいと心より願っております。

シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2023」

教育学研究科専門職学位課程長 音山 若穂

11月12日（日）、公開シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2023」（主催：国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会、共催：前橋市教育委員会）が、教育関係者 60 名以上の参加のもと Web・来場のハイブリッド形式で開催されました。話題提供者は専門職学位課程修了生の森下由佳先生（現・沼田市立沼田小学校教諭）です。

森下先生は「児童の読書習慣の形成を促す学習プログラムの検討ー朝読書と学級活動を活用してー」と題して、自身の大学院での課題研究と、当時の勤務校であったみなかみ町立水上小学校の第 6 学年での実践について報告しました。

森下先生はまず、実践した学級では読書を「全くしない」児童の割合は低いものの、読書の興味、有用感に関しては否定的回答が 6 割を超えていて、自主的な読書活動や興味や有用感を促すことには課題がみられるという現状を指摘しました。そこで森下先生は、中学校段階との繋がりも意識しつつ「なりたい自分に役立てようとする読書」、「個々の興味関心に合わせた読書」に視点をおき、学級での「朝読書」と、家庭での働きかけを中心に読書習慣の形成を目指すことにしました。

「朝読書」ではポートフォリオ形式の「読書カード」を活用し、「役立つ本を読むことができたか」や、「お家の人とのやりとりの様子」を振り返らせるとともに、カードに書いた内容を児童同士ペアにして伝え合う活動も取り入れました。また学級活動では、授業参観での本の紹介や、1 年生への読み聞かせ、読み聞かせボランティアの方との交流などを行うとともに、9 月には 1 学期を振り返り、課題を発見し読書活動を充実させる取組を考えさせました。その一つが中学生にインタビューし、アドバイスを動画に集録するものであり、その動画の一部も紹介されました。

こうした一連の実践の成果は、読書カードに記入された有用感に関する項目平均の上昇に表れているとともに、実践後に行った調査でも肯定的な結果が示され、一

定の成果がみられたことが確認されたことが報告されました。

話題提供の後、森下先生の課題研究の指導教員であった日暮利明先生（現・中部教育事務所指導主事）と吉田浩之先生（本学教育実践センター教授）からコメントを頂きました。

日暮先生は、大学院で学んだ理論を実践に変換するのはエネルギーが必要で、理論をかみ砕いて子どもたちに伝えていく難しさもあるとした上で、「森下先生は読書好きではない子どもにどうしたら読書の良さを伝えていくか、年間を通して粘り強く取り組んでいた。子どもたちの日々の様子は常に指導教員にもフィードバックされ、研究者教員はその変容の言語化をしてきた。この言語化によって、教師は自らの実践の手ごたえを感じられることに気づいた。大学院で、客観的に実践を見てもらえるということは貴重だと思う」と評価下さいました。

吉田先生からは、「学級活動の指導案において、特に児童生徒の実態や題材設定の理由を読むと、根拠に乏しい内容の記述をみる場合が少なからずあるが、本実践の研究授業の指導案は、研究的な視点を活用しデータや先行研究との比較等による根拠に基づく記述内容になっている。また、現状として学級活動の内容（3）の指導案の事例が少ないため、本事例は学校現場で参考になるものと思われる。公開研究会でも、『参考になった』という声が聞かれた」とのコメントを頂きました。

最後に、群馬県教育委員会事務局義務教育課の関貴充指導主事より指導講評を頂きました。関先生はまず「見てもらいたい本がある」と、今読んでいるという一冊の本を示し、「こうして紹介することが、『読んでみよう』というきっかけ作りにもなる。読後の感想を聞いたり、話したりすることにも繋がる。これが本の良さだと思う」と話されました。そして森下先生の実践について「学級活動の内容（3）は年間指導計画に位置付けるものだが、位置づいているからやるということでは子どもたちの問題意識は育たない。本実践では事前のアンケートで問題を把握することに加えて、「朝読書」と結び付けた読書カードの活用で事後の振り返りを定期的に行っている。カードの内容も取り組みやすいよう工夫されていた」と評価し、最後は「今後は学校全体としての取り組みとなることを期待している」と締めくくられました。

対面参加者からも意見が交わされ、充実したシンポジウムとなりました。関係者各位に深く感謝いたします。



令和 6 年度採用 群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 山口 陽弘

令和 6 年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役 86 名、既卒者 40 名、合計 126 名という結果でした（表 1 参照）。全体合格者に対する占有率は、小中特別支援学校が 28.0%、高等学校が 19.2%、全体では 26.5%です。表 2 は平成 31 年度から令和 6 年度までの志願者数（現役生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示すものです。一次・二次試験の合格率は昨年度に比べ減少し、占有率も減少しています。本年度の卒業予定者数は、昨年度の 220 名から 190 名への 1 割以上の定員減がありますので、昨年までと単純比較は出来ませんが、特に教員志望者数の長期的な減少は、大きな課題であり、今後この課題に真摯に取り組んで参ります。

本年度も同窓会による支援事業（面接試験の相談会・1 年生に向けた講演会など）も実施され、同窓会のご協力に感謝しております。また、本学の教育実践センター主催で、教採対策に限定しない教員の魅力を伝える講演会の開催もなされました。さらに群馬県教委と連携して、昨年度から教職の魅力を伝える講演会を開催しましたが、本年度はさらに 2 回に分け充実させて実施する予定

です。教員志望者・合格者を少しでも増やすために、今後も学生支援委員会の事業にみなさまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

表 1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

令和 6 年度採用	全体合格者数	群大合格者数			占有率	
		現役生	既卒者	合計	現役生	全体
小 学 校	157	15	9	24	9.6%	15.3%
中 学 校	195	55	18	73	28.2%	37.4%
特別支援学校	45	9	5	14	20.0%	31.1%
小 計	397	79	32	111	19.9%	28.0%
高等学校	78	7	8	15	9.0%	19.2%
合 計	475	86	40	126	18.1%	26.5%

表 2：群馬県公立学校教員採用試験における本学志願者数（現役生）と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
令和 6 年度	124	106 (85.5%)	86 (69.4%)
令和 5 年度	137	118 (86.1%)	100 (73.0%)
令和 4 年度	150	123 (82.0%)	101 (67.3%)
令和 3 年度	158	138 (87.3%)	102 (64.6%)
令和 2 年度	154	136 (88.3%)	113 (73.4%)
平成 31 年度	187	146 (78.1%)	126 (67.4%)

令和 5 年度の授業について ～コロナ禍を経て～

教務委員長 佐野 史

令和 5 年 5 月 8 日にコロナウイルス感染症が 5 類になり、さまざまな規制が緩められました。大学でも教室の人数制限が緩和され、対面授業が制限なく行えるようになったため、荒牧キャンパスには 2019 年度以前の活気が戻ってきております。マスクを着用しない学生も徐々に多くなってきており、学生たちの豊かな表情が教室内外で見られるようになりました。それでもコロナウイルスが撲滅されたわけではなく、インフルエンザの流行も見られるため、教室内外には消毒用アルコールを設置し、換気を心がけるなど、感染症対策は継続しています。また、令和 5 年度の授業は対面を基本としておりますが、適材適所でオンライン授業を活用できるようになっていきます。

今年度は、群馬大学共同教育学部第 1 期生が卒業を迎えます。彼らは大学生活が完全オンライン授業でスタートし、3 年生になってようやく対面授業が始まったと思ったら、共同教育学部本来の授業形態である宇都宮大学との遠隔授業を受けることになったという、なかなか

珍しい経験をした学年です。従来とは違う学び方で苦労も多かったと思いますが、その反面、多様な授業形態の中でもしっかりと学んで卒業に至った経験を、今後の自分たちの教員・社会人生活に活かしてもらえないのかと期待しています。



共同教育学部棟に登校する
学生たち



宇都宮大学との遠隔授業

教師を目指す学生・教職をスタートさせた教員のサポート

教育実践センター長 栗原 淳一

本センターは、三つの部門（教育実践開発部門・教職キャリア部門・教育臨床心理部門）の有機的な連携を図り、教師を目指す学生の実践的な教育から、現職教員の資質能力の向上や課題解決のサポートまでをトータルに支えることができる中核施設として更なる発展を目指しています（<https://center.edu.gunma-u.ac.jp/index.html>）。ここでは特に、近年の特徴的な取組を紹介します。

学生たちは、教職への意欲が高く、教師に必要な資質・能力を身に付けるべく学んでいます。一部の学生については、教育実習後に教職への意欲が低下することが分かってきました。そこで、3年次の教育実習Bが終了した時点の「事後学習」において、本センター教員が、実習を振り返らせながら教職の魅力に気付かせ、教職に就くことへの不安を取り除いたり、教壇に立つことへの自

信を持たせたりする講義を行うこととしました。また、採用が決まり教壇に立つ日が迫ってくると、「学校に赴任して新学期が始まるまでに、まず何をしなければならないのか」などといったことに不安を覚える学生が少なくありません。そこで、教職に就くことが決まった学生を対象に、本センター教員がこれらについて理解を図る講義を3月に行っています。さらに、実際に教師として働きだすと、悩みを抱え込んで自信をなくしてしまうケースもあります。そこで、5月に教職1・2年目の教員を対象とした教育相談会を実施しています。

今年度はさらに、群馬大学創基150周年記念関連事業として、「群大教育卒・スペシャリスト教員が語る仕事とプライベートの流儀 ～共同教育学部生へのメッセージ～」と題したシンポジウムと「教師を目指す高校生の悩み解消座談会」を実施しました。

4年ぶり完全対面でのオープンキャンパス

入学試験委員長 瀧田 秀行

オープンキャンパスを7月23日に開催しました。本年度は、4年ぶりに完全対面で実施することができました。国語・数学・英語専攻のワークショップ、音楽専攻の演奏会、美術専攻の授業体験、ミニキャンパスツアー、在校生とのフリートーク・個別相談と群馬大学共同教育学部での学びやキャンパスライフ、入試情報など、来場者が入学後の学生生活をリアルにイメージできるよう内容を企画しました。

当日は、多くの現役学生が専攻毎のプログラムの運営補助やキャンパスツアーのガイドで協力してくれました。本学部の魅力を語るだけでなく、来場者の質問に対して自身の経験を元に親身になって応える姿が大変印象的でした。

来場者は高校生269名、保護者71名、延べ340名でした。各専攻の体験型イベントはいずれもメ切前に予約でいっぱいとなりました。猛暑日が続く中お越しいただ

いた皆様、本当にありがとうございました。

受験生の皆さまのご健闘をお祈りしています。



美術専攻授業体験



在学生と高校生によるフリートーク



群馬大学共同教育学部ニュース「けやき通信」 第14号（2024年2月）

発行：群馬大学共同教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：<https://www.edu.gunma-u.ac.jp/>

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。